

校内連携・総合事例

茨城県A高校

担任の個人プレーではなく、喜びを分かち合える全員参加型の実践を設計

>> School Data

生徒数 / 約1000人 普通科など計24学級
進路状況 (2005年度) / 大短進学60.0%、専各進学22.0%、
就職16.0%、その他(浪人含む)2.0%
茨城県A高校

背景

進学実績を出しても、全員で喜びを分かち合えない

茨城県A高校のB先生は、担任するクラスから上位大学への進学者を輩出したことがあった。ところが、他の先生方と喜びを分かち合えない。進学実績を外部へ発信すれば、学校全体のPRになるのにそれもない。個人プレーにより結果を出すことの無意味さをひしひしと感じた。「喜びを共有する機会が必要だと思った。そこで、教師同士が一つの目的に向かって連携できる環境を作ろうと。教師間の連携を意識したクラス経営が実践できるようにしたいと考えました」

実践

ローテーションで進路ガイダンス。特定教員の負担を減らす

B先生はまず、それぞれの先生が、その活動を通して喜びや感動を実感できるよう、生徒の成績の伸びなどを「声かけ」により逐次報告することから始めた。「その先生の指導によって、生徒が成長したことを伝えることで教師間で成果を共有できました」

また、学年単位で年3回実施する進路ガイダンスをローテーションで担当することを同じ意識を持った同僚と企画し、実践。持ち回りにしたことで、徐々に当事者意識を持つ先生も増えていった。インターンシップも、普段とは違う生徒の輝く姿に触れられるように担任の先生や進路担当の先生に巡回担当を依頼。「生徒が頑張っている姿を見れば、インターンシップに協力的でない先生にも、その意義を理解してもらえ、モチベーションも上がります」。その他、先生方へ依頼したことに関しては徹底して結果を報告した。

成果と今後の課題

指導のクラス間格差が減少。担任・分掌が密接につながる実践が目標

意識を共有する機会を地道に積み重ねたことで、批判の声を時には浴びながらも、徐々に生徒の成長を喜びあえる仲間が増えたとB先生は実感。今後は、進路指導、生徒指導、教務、特別活動の取り組みや情報を、互いにつなげていきたいという。「生徒を多面的にとらえた指導が実現できるから」だ。それがキャリア教育の第一歩とも考える。

「それぞれの立場の教員が情報共有し、連携していれば、ある生徒が問題を起こしても、一方的に決めつけずに、別の角度からその子の良さを引き出すというフォローができます」。B先生は、キャリア教育は何も新しいことを実践することではなく、従来やってきた取り組みを「関連づける」ことが大事なのだと言った。「つまり、教師の個々の実践をつなぐ連携こそが今、教師に求められていることだと思います」。たとえば、連携実践の一つとして、教科の異なる教員同士がタッグを組んで、「授業コラボ もいいのではないかと」「生徒は教師を見ています。教師が楽しそうに連携していれば、それは必ず生徒たちにもいい影響を与えるはずですよ」

B先生の掲げる「理想的な校内連携」

